



日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

December 2016
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 50 no. 6

Published by JAIP 1-1-13-4F, Kanda-Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051

e-mail:office@jaip.jp

理事会報告 2016年9月13日(火)

出席(敬称略)相澤、松村、細谷、小松崎、鶴、深町(総務委員長・事務局)

1. 予算状況

ほぼ予算内で推移しているとして了承された。

2. 2016年度活動予定

・共同物流

討議の結果、全体での実現は難しいとして打ち切ることにした。ただし2-3社で試し、結果次第で再考する。

・二世の会(仮称)

二代目の経営者を中心にした会を設け、情報交換を行う。世話人は鶴理事が行い、11月に初会合を持つ予定。

3. 入会承認

・(株)MHMの審査を行い、了承された。

4. 委員会報告

・総務

東洋文庫の見学会は団体割引が適用される20名を目標としている。また予定していたセミナーは講師の都合で難しくなったので、再度委員会で検討する。

・メディア・広報

会報11月号の編集会議を10月に行う。また間を置かず新年号の編集に入るので新年の挨拶等協力頂きたい。

・文化・厚生

ボウリング大会は20名の参加を得て、盛況だった。関西パーティーは26名の参加予定。

・事業

TIBFでのバーゲンは2社増の13社で行う。また今回からクレジットカードの対応もする。

以上

海外ニュース

“Brexit”が2016年のWord of the Yearに

イギリスの辞書出版社コリンズが、2016年のWord of the Yearに“Brexit”を選んだ。この言葉は2013年に初めてコリンズに登場した。イギリスがああ歴史的な国民投票に向かっているあいだや、その後の余波が続いているあいだも、この言葉は3,400%という驚異的な上昇率で使用頻度が上がり、それはコリンズが言葉の使用調査を開始して以来初めてのことだった。コリンズでのBrexitの定義は、「イギリスのEUからの離脱」である。

そのほか候補に挙がった言葉は、“throw shade”や“mic drop”などがある。“throw shade”は、元々は1980年代後半、アメリカのゲイ・コミュニティで流行った言葉で、悪口を言ったり、侮辱したりすることを意味している。“mic drop”は、話をしたあとにマイクを落とす

まねをすることで、これ以上の議論は無駄、ということを示す意味がある。

今ある社会的・政治的規範を拒否するような、最近の文化的傾向とリンクした言葉も候補に挙がった。たとえば、“snowflake generation”は、2010年代に現れた若者たちで、その前の世代よりも打たれ弱く、すぐに不満を口にする者たちを指す。

Brexitは今年のCollins Dictionaryの紙版に追加掲載される。候補に挙がったすべての言葉は、Collinsdictionary.comに掲載される。

(The Bookseller Online, November 2, 2016 より抄訳)

情報提供：MHM 遠藤尚子

第23回東京国際ブックフェア

第23回東京国際ブックフェアは、9月23日(金)～25日(日)の3日間、東京ビックサイトにて開催されました。今回のブックフェアは、初めて7月から9月への会期変更、4日間から土日を含む3日間への会期短縮、同時開催展のない単独開催とする「読者謝恩」を掲げた新しいブックフェアに生まれ変わりました。今回は近年不参加だった出版社の再出展や工夫を凝らしたイベントなどで純粋に「読者」向けのフェアとなり、各社一層集客に力をいれている印象でした。結果、賛否はあるようですが、フェア自体が巨大なイベント・バーゲン会場となり、短縮した会期中で日々熱気に満ち溢れていました。ただし、主催社の想定よりも出展社数が伴わなかったのか、会場全体に空きスペースと思いき休憩コーナーが多く設置されており、若干の寂しさを覚えました。なお主催者発表によると3日間の来場者は4万564人と昨年のブックフェア単体来場者より約3千人増加したとのことです。

当協会主催の洋書バーゲンコーナーは、昨年同様ワゴン40台での展開でしたが、新規会員2社を含む12社にて開催しました。会場は大手出展社裏と決して良いスペースではなかったですが、サイン会場やキッズコーナー近辺ということもあり、多くの

来場者で非常に賑わいました。また、近年の顧客動向に対応するため、オンラインクレジット決済を初めて試験的に導入しました。使用に多少の混乱はあったものの、クレジット決済は売上の16%強を占め、多くのお客様から好評を得ることができました。この効果もあったのか会期中の売り上げは、前年対比116%となり、久しぶりに良い結果を報告できることとなりました。なお、この売上金額は4年前の土日を含む4日間開催の最終年度に近い金額を、3日間で売り上げたこととなり、例年になく忙しい会期中となりましたが、相変わらずの熱意と勤勉で、日々協力いただきました参加社の皆様に心より感謝申し上げます。

なお主催会社リードによると来季開催日程は、今期結果を踏まえて実行委員会との話し合いにより確定するそうです。当協会としては、状況に対応し、さらに来場者のニーズを把握し、出展社・内容など再検討することにより、一層活気のある洋書バーゲンにしていきたいと思います。

会員皆様のご意見・ご尽力お待ちしております。

(事業委員長：奥村尚史)

関西パーティー

今年の関西懇親パーティーは9月16日(金)に会員9社26名の方にご参加いただき、大阪第一ホテルにて行われました。

午後6時ごろ司会の開会スピーチの後、相澤理事長よりご挨拶と乾杯のご発声をいただいてパーティーは始まりました。

会場内を見渡すと皆様それぞれに会話が盛り上がりお酒も食事も進み、大いに楽しんでいらっしやっていたようでした。

時間が過ぎるの早いもので中締めは副理事長 松村氏より一丁締めでご挨拶いただき閉会となりました。

関西地区の会員の皆様がお互い情報交換ができるこの会を来年も開催できることを願っております。

(R.T記)



東洋文庫見学会に参加して

今回は、日本洋書協会で行く国内の洋書を見に行く企画、それも東洋文庫の見学会が9月21日に開催され、23名の会員の皆様と参加して参りました。

ミュージアム1階入口すぐの、東洋・日本についての多言語資料が一例にずらりと並ぶ、明るく賑やかなオリエントホールには、近年人気のちりめん本で、文庫グッズのオリジナルメモ帳のデザインにも使われている、長谷川武次郎の日本昔噺シリーズのドイツ語版も展示される一方、茗荷谷（小日向）の切支丹屋敷跡で発見された、シチリア出身のイタリア人宣教師ジョヴァンニ＝バッティスタ・シドッティ（Palermo 1668-Tokyo 1714）の遺体の文京区の最新調査状況が分かりやすくパネルで紹介されていました。

階段を2階に上がってさらに見上げる形になる、新しい東洋文庫の代表的イメージともいえる三方に高い書棚が聳えるモリソン書庫には、遺体が発見される前の300年間シドッティを文献上存在させていた、江戸中期の旗本でありながら徳川家宣の侍講として幕政を主導した新井白石（君美）がシドッティを審問して鎖国下の世界情勢を伝える貴重な資料となった『西洋紀聞』の和装の近代寫本をはじめとして、その他は洋書でイタリアと日本の関係を伝える稀覯本を揃えて陳列していました。オルガンティーノ、ヴァリニャーノ、天正遣欧使節団教皇謁見記、伊達政宗慶長遣欧使節記などの1600年前後の貴重なイエズス会通信がずらりと並び、中に、小さな15世紀刊の『東方見聞録』のインキュナブラが一点ありました。

東洋文庫は実に77種にのぼる『東方見聞録』のコレクションを所蔵しており、5年前に江戸東京博物館で開催された「ヴェネツィア展」で、壁一面に並ぶ世界各国語版の東方見聞録を見たことがあります。後で資料等参照したところ、さらに古い1485年アントワープ刊の版もある様ですが、今回展示されていたのはイタリア特集ということで、1496年ヴェネツィア刊のものでした。インキュナブラといえば大きなフォリオ判のイメージを持っていますが、折しも昨年没後500年を迎え、イタリアでは今日まで記念イベントの続く、文芸復興期のヴェネツィアの印刷家アルドゥス・マヌティウスが印刷所を開設して間もなく、まだ八折判の小型本を商品化していない頃に、この様な八折判より小ぶりな本がヴェネツィア先達の印刷家ヨハン＝バッティスタ・セッサによって制作されており、そのI・B・Sのイニシャルが三方を囲む、猫がネズミをくわえた工房のデヴァイスに、「ヴェネツィアのマルコ・ポーロ

による世界の驚愕すべき事物（東方見聞録）」と、太く均整のとれたゴシック調のローマン体がかくつきりと印刷されており、この心揺らす小さな古い本の中に、まさに眼福を味わう一時を得て、世界に20部と現存しておらず、大英図書館蔵書も完本ではない貴重な書物に拝眉する機会をいただきました。

モリソン文庫は漢籍とこの様な洋書を含む24,000冊以上、三菱三代目社長の岩崎久彌がロンドンタイムズ特派員で北京在住のオーストラリア人G・E・モリソンから一括で購入した額は現在の価値にして約70億円であったそうです。続く岩崎文庫は、日中朝鮮の古刊本に、浮世絵等の江戸時代の近代アート38,000冊以上、国宝の『史記（秦本紀）』に、『浦島太郎物語』絵巻等が、それぞれヲコト点の読み方や、浦島が鶴になって亀と末長く暮らす結末などの、楽しい解説とともに展示され、季節ごとの企画展「本のなかの江戸美術」では、数多くの浮世絵の中に、今回珍しく18禁制限が設けられ、今流行りの春画に、『練羊羹』という、開けると食べ物でなく豆判の春画セットが出てくる、江戸末期の珍しい印刷物に、その名称の妙とユーモアを感じさせられました。

見学後は至近の中華料理屋で協会の親睦会があり、業界50年のOBの方とも卓を囲まさせていただきました。書店、教科書、オンラインなど最新の動向や情報に触れ、大変勉強になりました。また、この9月に洋古書から洋書新本の部門に戻ってきた私にとっては、実に久しぶりに洋書業界の風に触れ、初対面の方々ともどこか懐かしい感覚で交流を広げることができるすばらしい会でございました。

東洋文庫がミュージアム開館とともにリニューアルして10月に5周年ですが、実はそれと同じ時期の11月25日に（当時）雄松堂書店が、丸善日本橋店内リニューアル時に、ワールド・アンティーク・ブック・プラザという世界で流通する洋古書・稀覯本の常設の専門店を開店して、お陰様で5年となり、東洋文庫にも集客の面等でも直接間接的に大変お世話になって参りました。一昨年、昨年と続いて、古書部長の新田勇さん、会長の新田満夫さんが相次いで亡くなるという不幸がありました。今年は節目を迎え、丸善と雄松堂が統合して新たな体制で古くて新しい洋書事業に取り組んでいくこととなります。来年はモリソン文庫100周年、東洋文庫設立の100周年は東京オリンピック後になりますが、その前に丸善創業150周年も控えております。

フランクフルトブックフェアについて思うこと

私が社会人として本の世界で働き始めて25年以上が過ぎました。その間、ほとんど毎年のようにフランクフルトブックフェアに参加してきました。今振り返って感じることは、小学生のような言いをする、「私はフランクフルトブックフェアが大好きだ」ということです。この何年かは、さらに好きになりました。

自分でこれまで書いてきたフランクフルトブックフェアの報告は、もちろん自分の業務に関連することばかりで、どれも堅苦しいものばかりでした。今回はみなさんの役には立たない情報であることを承知のうえで、私の大好きなブックフェアについて、だらだら書いてみようと思います。

Publishers Weeklyによると、2016年フランクフルトブックフェアの入場者数は277,000人超（前年は275,791人）。過去10年間下降していた参加人数が、この2年間連続でゆるやかではあるが上昇傾向とのこと。いまさら言うまでもありませんが、フランクフルトブックフェアは、世界最大規模で世界各国の出版社が一堂に集まる唯一の国際図書展だと言えます。（国際と名のつく図書展は、世界中の国々で開催されていますが、そのほとんどはドメスティックで「国際」と呼ぶには程遠いでしょう。）

フランクフルトでブックフェアが初めて開催されたのは500年以上前の1454年、ヨハネス・グーテンベルクがフランクフルト近郊のマインツで活版印刷を発明した直後で、書籍商らによって地元の書店で開催されたと言われています。その後フェアは印刷業・出版業と共に発展し、印刷物に関する法的な考え方、マーケティング、文章の普及などに大きく貢献し、また知識人が集結する場としても栄え出版業界を牽引し、17世紀末まではヨーロッパでもっとも重要なブックフェアとなったようです。

しかしその後、神聖ローマ帝国が反カトリック的書物に対する検閲機関をフランクフルトに設置し、出版への統制を強めたため、それを嫌った多くの出版業者はフランクフルトから検閲の緩いライプツィヒへと移転し、18世紀にはライプツィヒのブックフェアがヨーロッパでは最大となりました。

第二次世界大戦後、1949年にパウルス教会で戦後最初のブックフェアが再開され、その後、ライプ

ツィヒが東ドイツ側になったこともあり、西ドイツ側のフランクフルトがヨーロッパ最大の書籍見本市として発展し、現在にいたります。

こうやって500年の歴史を振り返ってあらためて短く書き留めると、グーテンベルグの存在がとても近く感じられて驚きます。自分とのつながりさえ身近に感じてしまいます。

近年、フランクフルトブックフェアには出版社だけでなく、代理店、書店、図書館、学術研究機関、作家、イラストレーター、翻訳者、映画製作会社、出版協会、印刷業者、古書販売店、ソフトウェア制作・販売業者、ジャーナリストなど多数の業種にわたる人々が参加し、出版物の制作・発売発表、著作権の販売交渉など様々なマーケティングや取引が行われています。

インターネットの普及で、以前よりもコミュニケーションがスムーズになり、画像や動画のやり取りも簡単になりました。特にフランクフルトブックフェアの場でなくとも、日常的に交渉や取引が可能な環境にありながら、それでも一年に一度世界中の出版社が昔と同じようにフランクフルトに集まり、face to faceで打ち合わせをする。また、飲み食いをして懇親を深める——特にヨーロッパの人々は、会期中であっても夕方になるとブースでワインを飲み始め、ほろ酔い気分になりながらビジネスについて語り合い、そこでまたビジネスが生まれる。インターネットや電子書籍など、様々な媒体が出現し、環境も大きく変化しましたが、500年以上の歴史のなかで、人と人とのやりとりはずっとこんな感じで続いてきたように思います。出版業界の厳しい状況はもちろん承知のうえで、生ぬるいことを言うようで恥ずかしいのですが、それでも様々な国の人々と「本」という共通点をとおして歴史あるフランクフルトで語り合えるこの何日間が、私は毎年とても楽しみで、またいとおしく感じています。

2017年のフランクフルトブックフェアは10月11日～15日に開催予定です。

（メディア広報委員長 松野夏生）

我が社・わが街

第6回 東麻布

ユサコ株式会社

森 薫

ユサコ株式会社は海外の学術雑誌・書籍の代理店として1950年に設立されました。当初は冊子体の輸入販売が中心でしたが、学術情報を伝えるメディアは年月とともに移り変わり、当社の事業もそれに伴いデータベースやオンラインコンテンツの販売へと遷移し、これまで図書館システムの販売・運用サポート、医薬系広告代理事業などにも業態を広げてまいりました。

もともと新橋にあった当社が現在の東麻布に移ってきたのは1999年のことでした。ちょうど東京タワーと地下鉄麻布十番駅間の住宅街に本社屋があります。近くにはロシア大使館があり食事处でもよくロシアの方を目にします。麻布十番というと駅周辺の商店街には老舗の和菓子屋や蕎麦屋だけでなく、人気の焼鳥屋やおしゃれなレストランが並び、若い方からご年配の方まで多くの方が行き交う魅力的な街ですが、同じ麻布でも社屋のある東麻布は、それとは対照的にとっても静かで落ち着いた雰囲気があります。

会社の近くには350mほどの小さな商店街（東麻布商店会）が南北に伸びているのですが、街全体と同様にひっそりとしています。戦前は近くに流れる古川（渋谷川）で鮎が釣れたこともあり飲食店が多く、映画館もあったため『銀座』と呼ばれるほどにぎやかな街だったようですが、現在は店舗もまばらで当時の面影はあまり残っておりません。

ところが、この一年中物静かな商店街に活気が戻る日があります。毎年9月末頃に開催される『かかし祭り』です。小規模ながら昭和50年から続く歴史のあるお祭りで、今年で42回目を迎えました。通りの入り口には電飾された大きなかかしがでんと置かれ、そこそこに並べられた個性的なかかしの面々が来訪者を出迎えてくれます。本当に小さな「かかしミニステージ」では子供たちに人気のバルーンアートショー（風船をねじって花や動物をつくるあれです）が開かれ、子供時代を思い出させる祭りの

雰囲気醸し出しています。

「東麻布になぜかかし?」と疑問に思われるかもしれませんが、東麻布商店会にはその昔東北方面から上京し、多くの人が住み込みで働いていたようです。故郷を離れて働く人たちを励ましたい、一緒にお祭りを楽しみたいという思いから山形県のかかし祭りをモデルに始まったとされています。

年に1度のイベントですが、小さな商店街に露店が並び、普段閑散とした街にたくさん子どもたちの声が溢れ、懐かしさと共にかつての活況を現在の私たちに思い起こさせてくれます。

さて、「我が社・我が街」では会社の近くの飲み屋を紹介するのが習わしになりつつあるようですが、レモンハイを1杯飲むだけで2時間は眠りから覚めることのない私には、行きつけの飲み屋はありませんので、一店界隈の隠れた名店をご紹介します。

閑静な住宅街にある東麻布には、ひっそりと営業している隠れ家的な名店がそこかしこにあります。赤羽橋駅から徒歩数分のところにある「蘭麻」もそのひとつ。夜は落ち着いた高級鉄板焼き屋ですが、お昼時は比較のお得な価格でランチセットが提供されていることもあり、ごちまりとした店内は近くの会社員で常に満席状態です。カウンター席では注文した料理を目の前の大きな鉄板で調理してくれるので、料理を待つ間も目を楽しませてくれ、胃袋も準備万端となります。一口サイズにカットされた黒毛和牛の中落ちステーキは融けるようで、ゴボウやレンコンなどの根菜がキレイに添えられ、目も舌も存分に楽しませてくれます。

東麻布の商店街界隈にはそうした食の名店がありつつ、昔ながらのそば屋や八百屋なども軒を連ねており、少しだけおしゃれで、訪れる人にどこか懐かしさを感じさせる場所でもあります。十番や西麻布のような華やかさはありませんが、お近くにお越しの際には不思議な魅力が溢れる東麻布にも是非お立ち寄りください。



かかし祭りに訪れる人を
出迎える大きなかかし



かかしまつりの様子

洋書 eBook 好評販売中!!

南江堂洋書部では、『ICUブック』などを発行する Lippincott Williams & Wilkins 社や『ブラウンワルド心臓病学』などを発行する Elsevier 社などの洋書 eBook の取り扱いを行っています。この機会にぜひご利用ください。



* eBook の特色 *

- ・オフラインでも閲覧可能
- ・メモやハイライトの追加など、便利な機能を搭載
- ・気になるページを瞬時に検索可能
- ・どの大きさの画面でも安定した見やすさ

※ご利用にあたっては VitalSource Technologies 社の Bookshelf というアプリケーションをダウンロードする必要があります(無料)。

詳しくは南江堂洋書部 HP へ
<http://www.nankodo.co.jp/e/eyosho-e/>



南江堂 洋書部

〒113-8410 東京都文京区本郷三丁目 42-6
E-mail: nkdyosho@nankodo.co.jp

TEL 03-3811-9957 FAX 03-3811-5031
URL: <http://foreign.nankodo.co.jp/>